HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チュヴァシ語の名詞化接辞-i/-ĕの節名詞化機能について
Author(s)	菱山, 湧人
Citation	北方言語研究, 11, 55-68
Issue Date	2021-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/97218
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80946
Type	departmental bulletin paper
File Information	NoLS11_03_055_YutoHISHIYAMA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 11: 55-68（日本北方言語学会 2021）

チュヴァシ語の名詞化接辞 -i/-ĕ の節名詞化機能について

菱 山　湧 人
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

キーワード：チュヴァシ語、名詞化、名詞節、述語性

0. はじめに

チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）の 3 人称所有接辞 -ĕ/-i[1] は主な機能として、所有関係の標示（例：unăn kil-**ĕ** [それ.GEN 家-3.POSS]「その人の家」）、複合語標示（例：čăvaš čĕlx-**i** [チュヴァシ 語-3.POSS]「チュヴァシ語」）、定性標示（例：Xĕrarăm-**ĕ** śamrăk. [女性-3.POSS 若い]「その女性は若い」）の機能を持つ。3 人称所有接辞と同形の別形態素である名詞化接辞 -i/-ĕ（ただし、ほとんどの場合 -i の異形態が用いられる）は、名詞句を形成する機能（例：pĭsăkk-**i** [大きい-NMLZ]「（それらのうち）大きいの」）だけでなく、名詞節を形成する機能（例：anne čirle-n-**i** [母 病気する-PTCP.PST-NMLZ]「母が病気になったこと」）も持つ。本稿では、名詞化接辞 -i/-ĕ の節名詞化機能に着目する。

Luutonen (2011) は、-i に従属節を形成する機能があるとし、これを統語的名詞化接辞 (syntactic nominalizer) であるとしている。Pavlov (2014) は、名詞や形容詞の文法カテゴリーとして区別カテゴリー（1.2 節で後述）を立て、区別接辞 -i に従属節を形成する機能もあるとしている。しかし、筆者の観察では稀だが -ĕ の異形態も現れうる。さらに、この接辞の分布（どのような述部要素に付くか）については詳細に記述されていない。

本稿で行った調査の結果、1）分布は狭いものの、-ĕ の異形態も現れうること、2）名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化は、述部が形動詞である場合に最も一般的で、名詞である場合に最も一般的ではないこと、が明らかとなった。調査結果に基づき本稿では、1）の事実が、名詞化接辞 -i/-ĕ が部分的に 3 人称所有接辞から発展したという先行研究の説を支持すること、2）から、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化は、述部要素の述語性が高いほど一般的であることを主張する。

本稿の構成は次の通りである。まず、第 1 節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第 2 節で調査方法、調査を行う上での前提、調査結果について述べ、第 3 節でまとめと考察を行う。最後に第 4 節で今後の課題を挙げる。

なお、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写[2]、例文番号、グロス、文字飾り、図表は特にことわりのない限り筆者によるものである。

---

[1] 子音で終わる語には -ĕ が、母音で終わる語にはその母音が落ちて -i が付くが、子音終わりの一部の語においては揺れも見られる。

[2] 例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

1. 先行研究

本節では、1.1 節で Luutonen (2011) の、1.2 節で Pavlov (2014) の記述をまとめ、1.3 節で問題提起を行う。

1.1. Luutonen (2011)

Luutonen (2011) は、接辞 -i, -xi, -sker（例：pïsăkk-i [大きい-i]「大きいの」、kaś-xi [夜-xi]「夜の」、sukkăr-sker [盲目の-sker]「盲目の人」）についての研究である。

Luutonen (2011: 90, 91) は、-i, -xi, -sker の基本的機能が名詞化であるとし、形容詞に付いた場合は名詞に、定形節に付いた場合は名詞化された従属節になると述べている。Luutonen (2011: 91) によると、これらの接辞の名詞化機能は統語的な性格のものであり、よってこれらの接辞は統語的名詞化接辞 (syntactic nominalizer) と呼ぶことができる。-i について Luutonen (2011: 83) は、共時的には単一の形態素であるが、歴史的には 2 つの接辞（チュルク諸語の -KI と 3 人称所有接辞）が混合したものであると主張している。以下、接辞 -i の節名詞化機能に関する記述をまとめる。

Luutonen (2011: 38, 85) は、機能的に従属節にあたる構造は -i によって形成されるとして、Ashmarin (1898: 175, 176) にある形動詞過去、数詞、存在述語に -i が付いた例 (1-3) を挙げている。

(1) [Śĭn kil-**n-i**]-ne epir kur-t-ăмăr.
人 来る-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC 1PL 見る-PST-1PL
「人が来たのを私たちは見た。」

(Ashmarin 1898: 176)

(2) Śĭru věren-men čăvaš-sem [tură **pĕrr-i**] śinčen
書くこと 学ぶ-NEG.PRF チュヴァシ人-PL 神 1 -NMLZ について
pit saxal pĕl-eśśĕ.
とても 少ない 知る-PRS.3PL
「書くことを学んでいないチュヴァシ人たちは、神が 1 つであることについてあまり知らない。」

(Ashmarin 1898: 176)

(3) [Ukśa **purr-i**]-ne pĕl-me-r-ĕm.
お金 ある-NMLZ-DAT/ACC 知る-NEG-PST-1SG
「お金があることを私は知らなかった。」

(Ashmarin 1898: 176)

Luutonen (2011: 85, 88) は、動作を表わす動名詞のほとんどは形動詞に -i の付いた形（例：kil-n-i [来る-PTCP.PST-NMLZ]「来たこと」、il-ess-i [取る-PTCP.FUT-NMLZ]「取ること」）であり、これが従属構造で頻繁に用いられることが、-i にチュヴァシ語の統語論における中心的な

役割を与えているとしている。

1.2. Pavlov (2014)

Pavlov (2014) は、名詞および形容詞の文法カテゴリーとして区別カテゴリー (категория выделения) (既知の対象を区別するカテゴリー) を立てており、これを表わす接辞 (区別接辞) は -i と -sker であるとしている (例：xula-r-i [街-LOC-i]「(それらの人たちのうち) 街にいる人」、xula-ra-sker [街-LOC-sker]「(街にいる人たちのうち、その) 街にいる人」、pĭsăkk-i [大きい-i]「(それらのうち) 大きいの」、pĭsăk-sker [大きい-sker]「(大きいもののうち、その) 大きいの」)。

Pavlov (2014: 112) は、名詞の区別カテゴリーについての項目で、区別接辞は語だけでなく節にも付加し、その場合は従属節を形成するとしている。Pavlov (2014: 112) は、区別接辞が節に付いた場合も、語に付いた場合と同様に、ホストの意味内容が文脈に大きく依存していると述べ、-i が主格名詞に付いた例 (4) と具格名詞に付いた例 (5) を挙げている。

(4) “Man ăš-ra san ač-u üs-et...”
1SG.GEN 中-LOC 2SG.GEN 子供-2SG.POSS 育つ-PRS.3SG
“[**Man ač-i**] ăśtan pallă?”
1SG.GEN 子供-NMLZ どこから 明らかな
「私の中であなたの子供が育っているの…」
「俺の子供であることがどうやってわかる？」

(Pavlov 2014: 112)

(5) “Tem ĕś-pe=ччĕ ĕntĕ?”
何か 仕事-INST=COP.PST MOD
“Pĕl-mest-ĕn pul-at’ [mĕn **ĕś-p-i**]-ne.”
知る-NEG.PRS-2SG である-PRS.3SG 何 仕事-INST-NMLZ-ACC
「どんなご用件でしたっけ？」
「知らないんだな、どんな要件かということを」

(Pavlov 2014: 112)

Pavlov (2014: 113) によると、区別接辞が (4) のように名詞の主格形[3]に付加されるのは、主にその名詞が複文の従属節述語の役割を果たす場合であるという。

Pavlov (2014: 116) はさらに -i が位格名詞に付いた例 (6) と奪格名詞に付いた例 (7) を挙げている。

[3] 主格はゼロ標示である。

(6) [Esĕ **kil-t-i**] savăntar-at’.
2SG 家-LOC-NMLZ 喜ばせる-PRS.3SG
「君が家にいることは喜ばしい。」

(Pavlov 2014: 116)

(7) [Ep **yut-rann-i**]-ne čuxl-aśśĕ.
1SG よそ-ABL-NMLZ-DAT/ACC 見破る-PRS.3PL
「私がよそ者（lit. よそから）であることは見破られている。」

(Pavlov 2014: 116)

Pavlov (2014: 239) は動詞についての項目で、形動詞が区別接辞 -i, -sker を取って、文中で主語または補語として機能すると述べ、形動詞未来に区別接辞 -i が付いた例 (8) を挙げている。

(8) a. [Ïran **uyart-ass-i**] pallă mar.
明日 晴れる-PTCP.FUT-NMLZ 明らかな COP.NEG
「明日晴れるかということは明らかではない。」
b. Epĕ [ïran **uyart-ass-i**]-ne šan-mast-ăp.
1SG 明日 晴れる-PTCP.FUT-NMLZ-ACC 信じる-NEG.PRS-1SG
「私は明日晴れることを信じない。」

(Pavlov 2014: 239, 240)

1.3. 問題提起

先行研究の記述には大きく 2 つの問題点がある。1 つ目の問題点は、-i の異形態のみが名詞化接辞[4]として扱われている点である。筆者の観察では、稀ではあるが -ĕ の異形態も節名詞化の機能を果たしうる。2 つ目の問題点は、名詞化接辞 -i/-ĕ の分布について詳細に記述されていない点である。先行研究では、（主格、具格、位格、奪格の）名詞、数詞、存在述語、形動詞に -i が付いた例が挙げられているが、筆者の観察では形容詞、代名詞、コピュラなど、他の要素にも接尾しうる。さらに、述部要素の種類によって、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化が一般的かどうかに違いがあるように感じられる。

本稿では -i/-ĕ を統語的名詞化接辞とみなした上で、異形態 -ĕ の分布と、名詞化接辞 -i/-ĕ の現れ方を明らかにすることを目的とし、調査を行う。

[4] 名詞化接辞 -i を Luutonen (2011) のように統語的名詞化接辞として扱うのは問題ないが、Pavlov (2014) のように区別接辞として扱うことには問題がある。なぜなら、区別カテゴリーの定義から、区別接辞の機能は「前の文脈で言及された既知の対象を区別して示すこと」であるといえるが、節名詞化は前の文脈とは関係なく起こる現象であり、区別カテゴリーの定義に合わないからである。

2. 調査

本節では 2.1 節で調査方法、2.2 節で前提、2.3 節で調査結果について述べる。

2.1. 調査方法

本稿ではコーパス調査とインフォーマント調査を行い、異形態 -ĕ の分布と、名詞化接辞 -i/-ĕ の現れ方を調べる。

コーパス調査では、チュヴァシ語のオンラインコーパス Čăvaš čĕlxin ikčĕlxellĕ śüpśi[5]（以下、CCIS）を用いて、用例抽出と定量的調査を行う（以下、出典が示されていない例文は CCIS から抽出されたものである）。CCIS はタグなしコーパスであり、検索でタグや記号を用いることができないため、品詞や語末の文字列を指定するなどして全体的な出現頻度を調査することはできない。よって、具体的な語形を入力して用例を収集し、可能なものに関しては出現数を調べることとする（ノイズは目視で除去する）。ある語形が CCIS から抽出されない場合は、Google 検索を用いて抽出されるかどうかを確認する。

インフォーマント調査では、筆者が作成した例文をインフォーマント[6]に提示し、「容認可能」、「違和感がある (?)」、「容認不可 (*)」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べる。

2.2. 前提

本節では、調査を行う上での前提として、調査対象である名詞化接辞 -i/-ĕ と名詞節、およびそれらについての本稿の立場について述べる。

名詞化接辞 -i/-ĕ は 3 人称所有接辞と同形であるが、これらは別形態素であるとみなす。その根拠として、(9) に見られるように、両者が共起しうることが挙げられる。

(9) Kayran ta temiśe kun xušši ăna śak xĕr tătăšax kurkalană, ančax
uyrămax asărx-ass-**i**-y-**ĕ** mĕn-ĕ tupăn-man.
特に 注意する-PTCP.FUT-NMLZ-BF-3.POSS 何-3.POSS 見られる-NEG.PRF
「それから数日間、彼をその娘は頻繁に見かけたが、特に（彼の）注意すべきところや何かは見られなかった。」

名詞節の主語は、(1-3, 6, 7) に見られるように、専ら主格で現れる。(4, 5) のように主語が明示されない場合もある。本稿では、述語とその項からなるまとまりを節とみなすが、項が現れていない場合であっても、項が想定できる場合は節とみなす。よって、(4, 5) の該当部分も名詞節であるとする。

名詞節の述部は多くの場合、(1-8) に見られるように、名詞化接辞 -i をとる（後述するように、異形態 -ĕ が現れる場合や、名詞化接辞 -i/-ĕ が現れない場合もある）。名詞化接辞 -i/-ĕ をとって名詞節述部として機能しうる要素としては、先行研究に挙げられている名詞、

[5] 総語数約 715 万語（2020 年 12 月 3 日現在）。例文の多くはロシア語対訳付き。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストを主に含む。
[6] 1999 年生まれでロシア連邦チュヴァシ共和国マリインスコ＝ポサツキー郡出身のチュヴァシ語母語話者の男性 A. G. 氏。

数詞、存在述語、形動詞のほかに、形容詞[7] (19-21)、代名詞 (10, 15)、コピュラ (12, 13) も観察される。

名詞節は様々な格をとり、文中で項として機能する（本稿で調査対象とする名詞節は、出現頻度の高い主格項と与対格項のものとする）。与対格が後続する場合、表層では (10) のように名詞化接辞 -i/-ĕ が落ちることがある。

(10) Ten, [epĕ **kam**]-**ne** pĕl-nĕ may,
多分 1SG 誰.NMLZ-DAT/ACC 知る-PTCP.PST ので
sire manpa pĕrle lar-ma ta avan mar pul'?
2PL.DAT/ACC 1SG.INST 一緒に 座る-INF も 良い COP.NEG INFR
「おそらく、私が誰かを知っているから、あなたにとっては私と一緒にいるのも良くないだろうか？」

ただし、与対格接辞は -i/-ĕ（3 人称所有接辞または名詞化接辞）の後に現れる異形態 -ne が後続することから、基底では与対格接辞の前に名詞化接辞 -i/-ĕ があると考えられる。よって、このような形式も名詞化接辞 -i/-ĕ を持つ形式とみなす。

主に非動詞述語文が埋め込まれる場合は、(2-7) のように、述語に名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付くこともあるが、コピュラが現れ、これが名詞化接辞 -i/-ĕ をとることもある（後述するように、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化が一般的かどうかは、述部要素の種類によって異なる）。コピュラには、コピュラ動詞 pul- の形動詞形 (11) のほかに、名詞節にのみ現れるコピュラ（以下、非定形コピュラと呼ぶ）ikken (12) がある。

(11) Kĕneke-re [kuśaruśă kam **pul-n-i**]-ne palărt-man.
本-LOC 翻訳者 誰 である-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC 記載する-NEG.PRF
「本には翻訳者が誰なのかが記載されていない。」

(12) [Ku mĕnšĕn śapla **ikkenn-i**] pallă.
これ なぜ そう COP.NFIN-NMLZ 明らかな
「これがなぜそうであるかは明らかだ。」

非動詞述語文の否定文が埋め込まれる場合は、基本的にコピュラ動詞 pul- の否定形動詞形もしくは否定コピュラ mar (13) が名詞化接辞 -i/-ĕ をとる。そのため、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化が一般的かどうかに関する調査は、肯定の節を対象に行う。

[7] チュルク諸語では名詞と形容詞を形態的に区別することが難しい場合が多い。本稿では、典型的に実体を表わし、項として機能するものを名詞、実体の性質を表わし、修飾語として機能するものを形容詞とみなす。

(13) [Es　　ayăplă　　**marr-i**]-ne　　kam　　pĕl-mest?
2SG　悪い　COP.NEG-NMLZ-DAT/ACC　誰　知る-NEG.PRS.3SG
「君が悪くないということを誰が知らないというのか？」

2.3. 調査結果

本節では、以下、2.3.1 節で異形態 -ĕ の分布、2.3.2 節で名詞化接辞 -i/-ĕ の現れ方について行った調査の結果を述べる。

2.3.1. 異形態 -ĕ の分布

調査の結果、分布は狭いものの、-ĕ の異形態も現れうることが分かった。異形態 -ĕ が現れている例としては、非定形コピュラ ikken に付いた例 (14) と、kam「誰」に付いた例 (15) が見られた。非定形コピュラ ikken に関しては、-i の異形態が付いた ikkenn-i が 34 例であるのに対し、-ĕ の異形態が付いた ikken-ĕ は 42 例と、-ĕ の異形態が付いた例の方が多く抽出された。非定形コピュラ以外の要素に付いた例として抽出されたのは、調査の限りでは (15) のみである。

(14) Erex,　ten,　erex=ex　pulĕ,　ančax　[văl　mĕnle　erex
ウォッカ　多分　ウォッカ=EMPH　INFR　ただ　それ　どんな　ウォッカ
ikken-ĕ]　sire　pallă　mar=i?
COP.NFIN-NMLZ　2PL.DAT/ACC　明らか　COP.NEG=Q
「ウォッカなのは多分ウォッカでしょう、ただ、それがどんなウォッカであるか、あなたは分かりませんか？」

(15) [**Kam-ĕ**]　pall=ax　ĕntĕ　—　niměś-sem.
誰-NMLZ　明らか=EMPH　MOD　ドイツ人-PL
「(そいつらが) 誰であるかということは明らかさ、ドイツ人らだよ。」
(Ĭltăn văčăra)

2.3.2. 名詞化接辞 -i/-ĕ の現れ方

調査の結果、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラを介さず直接付くことによる節名詞化が一般的かどうかは述部要素の種類によって異なり、述部が形動詞である場合に最も一般的で、名詞である場合に最も一般的ではないことが分かった。本節では、調査結果を名詞節述部の種類ごとに分けて述べる。以下、2.3.2.1 節で名詞、2.3.2.2 節で形容詞、2.3.2.3 節で形動詞について述べる。

2.3.2.1. 名詞

述部が名詞である場合は、名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付くことによる節名詞化が一般的ではなく、コピュラを介した構造が一般的であることを示唆する結果が得られた。

まずコーパス調査の結果について述べる。いくつかの名詞に -i/-ĕ を直接付けた形式を入

力して検索したところ、ヒットした例のほとんどが 3 人称所有接辞をとった所有名詞句の主要部要素であった。調査の限りでは、(4) のように名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付いた例は、Google 検索でヒットした文学作品から抽出された (16) をはじめ数例のみであった。

(16) [Měnle **śïnn-i**]-ne kur-t-ăn=i?
どんな 人-NMLZ-DAT/ACC 見る-PST-2SG=Q
「(そいつが) どんなやつであるかを見たか？」
(Ăśta-ši esĕ xalĕ?)

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。名詞に名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付いた (17, 18)a の容認度を確認したところ、これらは「違和感がある」と判定された。インフォーマントは自然な表現として、コピュラ動詞 pul- の形動詞形を介した (17, 18)b を挙げた。

(17) a. ?[Văl **śïravś-i**]-ne pĕl-et-ĕn=i?
それ 作家.NMLZ-DAT/ACC 知る-PRS-2SG=Q
b. [Văl **śïravśă pul-n-i**]-ne pĕl-et-ĕn=i?
それ 作家 である-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC 知る-PRS-2SG=Q
「君はその人が作家であることを知ってる？」

(18) a. ?[Văl **śïravś-i**] pallă pul-č-ĕ.
それ 作家-NMLZ 明らか なる-PST-3SG
b. [Văl **śïravśă pul-n-i**] pallă pul-č-ĕ.
それ 作家 である-PTCP.PST-NMLZ 明らか なる-PST-3SG
「その人が作家であることが明らかになった。」

2.3.2.2. 形容詞

述部が形容詞である場合は、名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付くことによる節名詞化も一般的であることを示唆する結果が得られた。

まずコーパス調査の結果について述べる。CCIS からは (19-21) のように、様々な形容詞に名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付いた例が抽出された。(20, 21) は複数の名詞節を含む例であり、(21) は形容詞ではなくコピュラ動詞が名詞化接辞 -i/-ĕ をとっている名詞節も含んでいる。

(19) [Kaś-čen kan-masăr čăt-ma **yïvărr-i**] pallă pul-č-ĕ.
夜-まで 休む-CVB 耐える-INF 難しい-NMLZ 明らか なる-PST-3SG
「夜まで休まずに耐えるのが難しいことが明らかとなった。」

(20) [Esir měn tuy-n-i]-ne, [śav tuyăm měn
2PL 何 感じる-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC その 気持ち 何
yatl-i]-ne pĕl-es kil-et=i sirĕn?
名前の-NMLZ-DAT/ACC 知る-PTCP.FUT 来る-PRS.3SG=Q 2PL.GEN
「あなたが何を感じたかを、その気持ちが何という名前であるかを知りたくないですか、あなたは？」

(21) Văl *efîr*-t-i sasă-sem tărăx [śapăśu pit te věri
3SG 現場-LOC-ADJLZ 音-PL により 戦い とても 熱い
pul-n-i]-ne, [tăšman **văyl-i**]-ne,
である-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC 敵 強い-NMLZ-DAT/ACC
[văl pĕlĕt-ren kay-asšăn marr-i]-ne ănlan-č-ĕ.
それ 空-ABL 去る-OPT COP.NEG-NMLZ-DAT/ACC 分かる-PST-3SG
「彼は現場の音から、戦闘が非常に激しいことを、敵が強いことを、その空域を通過したくないことを理解した。」

次に、インフォーマント調査の結果について述べる。名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付いた (22, 23)a の容認度を確認したところ、コピュラを介した (22, 23)b と同様に「容認可能」であるという。

(22) a. [Văl měn **yatl-i**]-ne pĕl-mest-ĕp.
それ 何 名前の-NMLZ-DAT/ACC 知る-NEG.PRS-1SG
b. [Văl měn **yatlă** **pul-n-i**]-ne pĕl-mest-ĕp.
それ 何 名前の である-PTCP.PST-NMLZ-DAT/ACC 知る-NEG.PRS-1SG
「その人の名前がなんであるか私は知らない。」

(23) a. [Văl měn **yatl-i**] pallă pul-č-ĕ.
それ 何 名前の-NMLZ 明らか なる-PST-3SG
b. [Văl měn **yatlă** **pul-n-i**] pallă pul-č-ĕ.
それ 何 名前の である-PTCP.PST-NMLZ 明らか なる-PST-3SG
「その人の名前がなんであるかが明らかになった。」

2.3.2.3. 形動詞

述部が形動詞（過去 -nĂ、未来 -As）である場合は、(1, 8) のように、名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付くことによる節名詞化が一般的である。(24) のようにコピュラを介した構造も抽出されたが、非常に稀である。

(24) *Gal'cin* puś-ne sul-sa [xăy *bastion*-sen-če
PN 頭.3.POSS-DAT/ACC 振る-CVB REFL.3SG 稜堡-PL-LOC
pul-nă **ikken**]-ne palărt-r-ě.
いる-PTCP.PST COP.NFIN.NMLZ-DAT/ACC 示す-PST-3SG
「ガリツィンは頭を振って、自分が稜堡にいたことを示した。」

形動詞未来 -As を述部とする与対格項の名詞節の場合は、(25) のように名詞化接辞 -i/-ě を持たない例も多く観察された。

(25) Epě [esir **kil-ess]-e** śeś kět-se purăn-t-ăm.
1SG 2PL 来る-PTCP.FUT-DAT/ACC だけ 待つ-CVB 暮らす-PST-1SG
「私はあなたが来るのだけを待って暮らしていた。」

CCIS からは、述部が kil-「来る」＋形動詞未来 -es で与対格が後続する場合、名詞化接辞 -i/-ě を持つ形式 kilessine が 67 例であるのに対し、名詞化接辞 -i/-ě を持たない形式 kilesse は 250 例と、名詞化接辞 -i/-ě を持たない形式の方が多く抽出された。

3. まとめと考察

本節では調査結果をまとめ、考察を行う。以下、3.1 節で異形態 -ě の分布について、3.2 節で名詞化接辞 -i/-ě の現れ方について述べる。

3.1. 異形態 −ě の分布

調査の結果、ほとんどの場合は -i の異形態が現れるが、-ě の異形態も現れうることが分かった。異形態 -ě の分布は 3 人称所有接辞の同形の異形態に比べて狭く、本稿で行った調査では、非定形コピュラ ikken に付いた例（(14) を含め 42 例）と kam「誰」に付いた例 (15) のみが見られた。ただし、非定形コピュラ ikken に関しては異形態 -i が付いた形 ikkenni（34 例）よりも異形態 -ě が付いた形 ikkeně（42 例）の方が多く抽出された。この結果も考慮すると、名詞化接辞に異形態 -ě を認めてもよいと筆者は考える。-i と -ě の異形態が現れうる点は 3 人称所有接辞と同様であり、このことは、名詞化接辞 -i が部分的に 3 人称所有接辞から発展したという Luutonen (2011) の説を支持する。

3.2. 名詞化接辞 −i/−ě の現れ方

調査の結果、名詞化接辞 -i/-ě がコピュラを介さず直接付く構造は、述部が形動詞である場合に最も一般的で、名詞である場合に最も一般的ではないことが明らかとなった。以下に、調査結果を簡潔にまとめた表 1[8]を挙げる（表中の縦軸は述部要素の種類、横軸の Ø は述部

[8] 表 1 は、調査結果を述部の種類（名詞・形容詞・形動詞）ごとに大まかにまとめたものである。厳密には、名詞化接辞 -i/-ě を取らない構造は形動詞未来が述部である場合にのみ見られるため、形動詞過去と形動詞未来で調査結果は異なっている。名詞・形容詞も、名詞化接辞 -i/-ě が直接付く構造が可能かどうか、一般的かどうかは、語によって異なっている可能性がある。

が名詞化接辞 -i/-ĕ をとらない構造、-i/-ĕ は述部に名詞化接辞 -i/-ĕ が直接付く構造、COP-i/-ĕ はコピュラを介した構造を表わす。◎は当該の構造が最も一般的であること、○は一般的であること、△は分布が限られる、もしくは稀であること、×は観察されないことを示す)。

表 1：調査結果のまとめ

	Ø	-i/-ĕ	COP-i/-ĕ
名詞	×	△	◎
形容詞	×	○	○
形動詞	△	◎	△

このことから、チュヴァシ語の名詞節では、述部要素によって述語性（単独で述語として働くことができるかどうか）に差が見られると言える（形動詞＞形容詞＞名詞）[9]。換言すれば、名詞化接辞 -i/-ĕ がコピュラ[10]を介さず直接付くことによる節名詞化は、述部要素の述語性が高いほど一般的であると言える。このような述語性の差は、主節では名詞節ほど明確には現れない。主節では (26) のように、名詞や形容詞が述語である場合も（現在時制の肯定文の場合は）コピュラが現れない。

(26) a. Epĕ *inžener*.
1SG エンジニア
「私はエンジニアだ。」
b. Esĕ śamrăk.
2SG 若い
「君は若い。」

(Andreev 1966: 60)

形動詞未来 -As を述部とする与対格項の名詞節では、名詞化接辞 -i/-ĕ をとらない構造もみられることが分かった[11]。このことから、形動詞未来 -As は（与対格が後続するという条件下で）それ自身が節を名詞化する力を持っていると言える[12]。これは、この形動詞が項をとるなどの動詞的な力を持ちながらも、名詞的な性格が強い（＝動名詞的である）ことを

[9] 通言語的によく見られるパターン（動詞＞形容詞・名詞）と比べ、形容詞と名詞の間で差が見られる点が注目される。本稿で扱った現象と直接関係するものではないが、類似の差を示す通言語的な階層には、述語による一致の起こりやすさを示した述語階層（動詞＞形動詞＞形容詞＞名詞）(Comrie 1975) や、述語の時間的安定性の階層（動詞＞形容詞＞名詞）(Givón 1984) がある。

[10] 非定形コピュラ ikken および否定コピュラ mar は、形動詞と同様にほとんどの場合名詞化接辞 -i/-ĕ をとる。

[11] 名詞化接辞 -i/-ĕ をとらない構造は、非定形コピュラ ikken を述部に持つ与対格項の名詞節でもわずかに観察された。ただし、名詞化接辞 -i/-ĕ を（基底に）持つ形式 ikken-ne が 1848 例であるのに対し、名詞化接辞 -i/-ĕ を持たない形式 ikken-e は 3 例とわずかであり、例の少なさと音形の類似から、誤記とも考えられる。

[12] 名詞化接辞 -i/-ĕ の助けなしで節を名詞化できるかどうかは、述語性（コピュラの助けなしで述語として機能できるかどうか）とは別の性質である。

示している。

4. 今後の課題

本稿の意義としては、チュヴァシ語の名詞節における名詞化接辞 -i/-ĕ について、1）異形態 -ĕ も現れうること、2）現れ方が述部要素の種類によって異なること、を指摘した点が挙げられる。

問題点としては、1）調査対象を限定したこと、2）定量的調査が十分にできていないこと、3）インフォーマントが 1 人であること、が挙げられる。よって、今後はより網羅的な調査を行う必要がある。

今後の課題としては、1）なぜ異形態 -ĕ の分布が 3 人称所有接辞に比べて狭いのか、2）なぜ述語性に関して主節と従属節の間に不均衡が見られるのか、を明らかにすることが挙げられる。さらに、チュヴァシ語における節名詞化を、他のチュルク諸語における節名詞化と対照することも今後の課題である。チュヴァシ語の名詞節は、主格主語が現れ、主要部に付く名詞化接辞 -i/-ĕ によって節が名詞化されるが、多くのチュルク諸語の名詞節は一般的に、(27) のように名詞的な構造である属格所有構造をとる。

(27) [(Sen-in) piyano çal-dığ-ın]-ı bil-mi-yor=du-m.
2SG-GEN ピアノ 弾く-PTCP.PST-2SG.POSS-ACC 知る-NEG-PROG=COP.PST-1SG
「君がピアノを弾くのを私は知らなかった。」（トルコ語）
(Göksel and Kerslake 2005: 351)

ただし、多くのチュルク諸語の名詞節では (28, 29) のように名詞化要素が述部に現れうる。

(28) [O-nuŋ aɣa-m-**dïɣ**-ï]-nï tana-dï-m.
3SG-GEN 兄-1SG.POSS-NMLZ-3.POSS-ACC 気付く-PST-1SG
「私は、彼が自分の兄であることに気づいた。」（トルクメン語）
(Johanson 1998: 60)

(29) [Bez-neŋ anda qun-ɣan-**lïq**]-nï bel-äl-mäs-lär.
1PL-GEN そこに 泊まる-PTCP.PST-NMLZ-ACC 知る-PSB-NEG.FUTI-3PL
「私たちがそこに泊まったことは知られないだろう。」（タタール語）
(Xisamova 2006: 240)

チュヴァシ語の名詞化接辞 -i/-ĕ と他のチュルク諸語の名詞化要素の機能と分布には類似点と相違点があるように思われる。対照研究を行う際は、特にこれらを明らかにすることを目標としたい。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NEG	negative	否定
ABL	ablative	奪格	NFIN	non-finite	非定形
ACC	accusative	対格	OPT	optative	願望
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	PL	plural	複数
BF	buffer	介入子音	PN	person name	人名
COP	copula	コピュラ	POSS	possessive	所有
CVB	converb	副動詞	PRF	perfect	完了
DAT	dative	与格	PROG	progressive	進行
EMPH	emphasize	強調	PRS	present	現在
FUT	future	未来	PSB	possibility	可能
GEN	genitive	属格	PST	past	過去
INF	infinitive	不定形	PTCP	participle	形動詞
INFR	inferential	推量	Q	question	疑問
INST	instrumental	具格	REFL	reflexive	再帰
LOC	locative	位格	SG	singular	単数
MOD	modality	モダリティ	-		接辞境界
NMLZ	nominalizer	名詞化	=		接語境界

参考文献

Andreev, I. A. (1966) Čuvašckij jazyk. *Jazyki narodov SSSR. Tom II. Tjurkskie jazyki.* Moskva: Izdatel'stvo Nauka. 43-65.

Ashmarin, N. I. (1898) *Materialy dlja issledovanija čuvašskogo jazyka: Č. I. Učenije o formax (Morfologija)*. Kazan'.

Comrie, B. (1975) Polite Plurals and Predicate Agreement. *Language 51 (2)*. 406-418.

Givón, T. (1984) *Syntax: A functional-typological introduction. Volume I*. Amsterdam: John Benjamins.

Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish A Comprehensive Grammar.* New York: Routledge.

Johanson, L. (1998) The structure of Turkic. Johanson, L. and É. Á. Csató (eds.) *The Turkic languages.* London, New York: Routledge. 30-66.

Luutonen, J. (2011) *Chuvash Syntactic Nominalizers: On *-ki and its Counterparts in Ural-Altaic Languages.* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Pavlov, I. P. (2014) *Sovremennyj Čuvašskij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. Čeboksary: Čuvašskij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.

Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian.* Cambridge: Cambridge University Press.

Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiäse.* Qazan: Mäğärif näşriyatı.

調査資料

Ăśta-ši esĕ xalĕ? (http://elbib.nbchr.ru/lib_files/0/kchl_0_0000453.pdf) [最終閲覧日: 2021/1/13]

Čăvaš čĕlxin ikčĕlxellĕ śüpśi (http://corpus.chv.su/) [最終閲覧日: 2020/12/3]

Ĭltăn văčăra (http://elbib.nbchr.ru/lib_files/0/kchl_0_0000654.pdf) [最終閲覧日: 2020/12/3]

On the Clause-nominalizing Function of the Chuvash Nominalizer *-i/-ĕ*

Yuto HISHIYAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

The Chuvash nominalizer *-i/-ĕ*, which is identical in the form with the 3rd person possessive suffix, forms not only noun phrases (e.g. *pĭsăkk-**i*** [big-NMLZ] “the big one”), but also noun clauses (e.g. *anne čirle-n-**i*** [mother be.sick-PTCP.PST-NMLZ] “that mother got sick”).

Luutonen (2011) argues that *-i* has a function that forms subordinate clauses, and regards it as a syntactic nominalizer. Pavlov (2014) has set up the category of distinction (категория выделения) as a grammatical category for nouns and adjectives, and states that the distinction suffix *-i* has a function that forms subordinate clauses. However, in my observation, although rarely, the allomorph *-ĕ* may also appear. Moreover, the distribution of this suffix when it functions as a clause-nominalizer is not described in detail in the prior research.

From the research, it became clear that 1) although the distribution is limited, the allomorph *-ĕ* may also appear, and 2) the nominalization by directly attaching *-i/-ĕ* without copula is the most common when the predicate of a noun clause is a participle, and the least common when it is a noun. Based on the findings, I argue that 1) supports the theory of previous research that the nominalizer *-i* partially evolved from the 3rd person possessive suffix, and from 2), the higher the level of predicatehood of the predicate element, the more common the clause-nominalization by directly attaching *-i/-ĕ* is.

（ひしやま・ゆうと　boltwatts@gmail.com）